

# 蒲生干潟の植物53 分布調査 2026年3月17日



図1 ハママツナの新芽はまだ見られず



根元から新芽が伸びるヨシ(図2)とハマニンニク(図3)



図4 ハマニガナの新芽 図5 ウンランの新芽 図6 ハマエンドウの新芽 ママツヨイグサ(図7)とコマツヨイグサ(図8)ロゼット

調査日 2026年3月17日 (火) 10:00~11:15  
 3月中旬となり、いたるところに春の息吹を感じられる調査となった。エリアAの定点観測を行っている範囲ではハママツナの新芽はまだ見られなかった。今後徐々に芽生え始め6月ごろまでには一面に広がっていくものと思われる。エリアBのヨシは、昨年の枯れた草体そのまま残っているが、根元には緑色の新芽が生えだしていた(図2)。エリアC, Dで多く見られるハマニンニクも同様に根元から新芽を出していた(図3)。図4~6はエリアD, Fで見られた植物の新芽である。これらの植物は種子から新たに芽生えるだけではなく、地下茎で冬を過ごし、春になると地下茎の節から新芽が生えてくるという栄養繁殖の生態をもつ多年草である。一方でハマヒルガオの新芽はまだ確認できなかった。同様に種子からも地下茎からも新芽が出す生態をもつが、より高い地温を必要とする発芽戦略の違いを反映しているものと考えられる。エリアG付近に多く見られるママツヨイグサ(図7)とコマツヨイグサ(図8)は、冬を過ごした葉が枯れ内側から新たな葉が生えてきている様子が見られた。個体によっては茎が伸び草体を立ち上げ始めているものも確認された。  
 (伊藤勝彦)